

次年度対策

食味・品質の維持向上を目指すのであれば、5月20日あたりを移植日とする。

早すぎる田植え：出穂が早まり高温登熟する → 食味の低下や、胴割れ粒・白未熟粒の増加

遅すぎる田植え：梅雨入りし活着不良、生育量の不足による減収

温暖化により、移植から出穂までの期間が短くなってきている。

⇒ 活着を良くし、分けつを促進し、草の状態のうちに養分を貯めないと良い米は穫れない。

活着を良くするには

(1) 良い苗を植える

種子の更新、種子消毒の実施、適切な播種量、

適切な温度管理（徒長、細菌性病害、ムレ苗に注意） ……迷ったら換気する（強風時以外）

場合によっては田植えが近づいたところで少し追肥

(2) 過度な疎植はしない

坪 60 株植え（株間 18cm）、植付本数 3～4 本/株

(3) 深植えしない

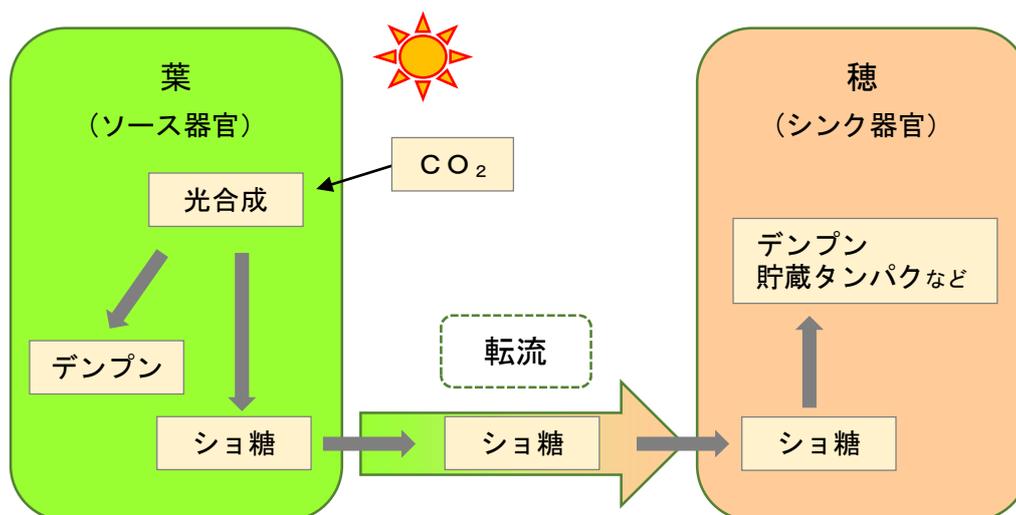
植付深度＝3 cm（手の指の関節 1 つ分） ……深植えは顕著に分けつを抑制する

(4) 水温を確保する

山際で水温が低いようであれば『よけ』を回してから入水するなどし、水温を確保する。

(5) ガス湧き対策

移植後、有機物の分解が進みガスが湧く場合は、除草剤を散布して7日ほど経ったところで軽く干す。



イネの光合成・転流・登熟のイメージ図

光合成で作られた養分はデンプンの形で茎に蓄えられます。茎に蓄えられたデンプンは、出穂後に穂に転流し、粳の登熟に使われます。低日照など不良環境下では、この作用の貢献度が高くなります。

(東京大学 作物学研究室のホームページの内容を基に一部改変)